

在構文の $\mathcal{D}\text{ær}$ とその指示性

Used for Old English Syntax', *Neophilologische Mitteilungen* 93(1992), § 7(163-83)

13) cf. R. Sugiyama, 'The Origin of the Function Word *there*' 『鹿児島県立短期大学紀要』20号 1969. pp.125-143.

14) Breivik(1983), p.325.

の表現形式として、‘NP+be’構文の不適性に加えて、文の座りの悪さと相まって、この存在表現形式が Breivik が言うように ‘verb-second constraints’ に合わせて主流とり、ますます定型化していったのであろう。

注

- 1) Leiv E. Breivik, *Existential THERE*(Bergen:University of Bergen, 1983), p.275.
- 2) s.v. *there*, 4d. 因みに MED では all21 *Peterb. Chron.* や all50 *Vsp. D. Hom.* などからの種々なパターンの例文があげられている。(s.v. *ther*).
- 3) ‘Expletive or Existential *There*’ *London Mediaeval Studies*, vol. II, Part 1, (1951), p.32.
- 4) *Existential THERE*(1983), p.357.
- 5) H. Sweet(ed), *King Alfred’s Orosius*, EETS OS.79(1883, reprinted 1959), pp.20-21.
- 6) *Twelfth Century Homilies in MS Bodley 343* EETS OS.137(1909, reprinted 1962), p.126.
- 7) 例えば N.E.Enkvist はこのような *pa* を ‘an action marker’ であるとし, R.Foster は ‘a repeatable marker of temporal sequentiality, without carrying any real grammatical information’ であると考え。これを受けて R.Waterhouse は特に Ælfric の ‘Lives of Saints’ においては ‘*pa* is often used in clauses that narrate not action but speech or mental perception’ と主張する。(Breivik p.262).
- 8) D.L.Bolinger, *Meaning and Form* English Language Series 11, (London: Longman, 1977), pp.92-93.
- 9) P.Erdmann, *THERE Sentences in English: A Relational Study Based on a Corpus of Written Texts*(Tuduv-Studien, Reihe Sprachund Literaturwissenschaften 6, Munich, 1976), p.83. Quoted in Breivik(1983), pp.165-66.
- 10) Chafe(*Meaning and the Structure of Language*, 1970, pp.101-2) は *It’s hot.* や *It’s Tuesday.* などの *it* は ‘cover the total environment, not just some object within it’ とし, それを ‘ambient’ ということばで表わしているのに対して, Bolinger は ‘...it has a referent, in this case precisely the “environment” that is central to the whole area’ (*Meaning and Form*(1977), p.78) と考える。つまり, 一般には意味上は empty と考えられるこの *it* にも漠然とした referent が感じられるということである。
このことは同様に形式主語の機能を持つ E.*there* にもあてはまるであろう。現に現代の黒人英語では *there* の代わりに *it* を用いる現象が見られるが, この漠たる referent はまさに *it* であり *there* である, 渾然一体となった感じのものと言えるかも知れない。言うまでもなくそのような現象はなにも現代に始まったことではなく, ME期にも一部 *hit* が *per* 代わって存在文に用いられたことは周知の事実である。
- 11) D.Nagashima, ‘A Historical Study of the Introductory *There* 1,’ *Studies in Foreign Languages and Literatures* 10(1972), p.162.
- 12) D.Donoghue & B. Mitchell, ‘Parataxis and Hypotaxis:A Review of Some Terms

り、その意味では *pa* とは一線を画す。即ち、上述の *Orosius* からの例などに見られるようにある場面での *pær* の頻出は漠然とある場所を referent とする空間の中で A. *there* と E. *there* 間の、いわゆる灰色の指示機能を有することで連なり、一連のコンテクストを構成する。そのコンテクストを構成する一文一文をいわば横系とし、それらを縦に貫く縦系のような働きをしていると考えられるであろう。

V

以上、古英語期における *there* 存在文と目される文に起こる *pær* を中心に、主にその指示性の有無に関して見て来た。古英語期においてはその *pær* はまだ、いわば灰色であり、その意味では *pær* 存在文は形態上は存在するにしても実質的には現代英語のそれに比し、かなり未成熟なものであったと思われる。この時期はものの存在・非存在を表わす時にもまだ ‘NP+be’ 構文が、ごく一般的であり、¹³⁾ *pær* 存在文の頻出度が完全に他の存在文を圧倒するのは、13世紀半ばである。この存在文を導く *pær* (*per*) の空間的指示機能の色合いが徐々に、そして限りなく薄れて行くことが、即ちこの存在構文の成熟の度合を示すことになる。その点から言えば真の *there* 存在文の出現は中英語期に入ってからであると考えるのが妥当であろう。

Breivik は次のように言う。¹⁴⁾

...the semantically neutral particle *there* 1 already functions as a dummy subject in Old English, and that its presence in pre-verbal construction in declarative main clauses is motivated by the verb-second constraint.

しかし、Breivik が言うように古英語において存在文の *pær* が完全に ‘dummy’ の状態であり、単に ‘verb-second constraint’ を満たすに適う語であったならば、この時期同じ様な立場にあった *pa* にもその可能性があった筈である。むしろ、後者の方が音声的に軽く、そのような働きの、より適した語であったといえよう。事実、‘*pær* + V + *pa* + NP... / *pa* + V + *pær* + NP...’ 型の文は少なくはない。

ところが、やはり存在・非存在の基盤である場所的・空間的指示詞 *pær* より分化した語が選ばれ、パターン化して行ったということは、そこに本来の意味から繋がった響きを残していたことの証明を見ることができるであろう。

それがやがて、ME期に入り語順の固定化が進むにつれて、‘new information’

構文的には立派な E.there 存在文であるが、それをコンテキストの中に置いて見ると、先に見たように、現代英語の there 存在文には見られないような、踵を接しての *pær* の反復の中に起こるといふ、この時期独特の分布が認められる。場所を表わす副詞句を伴うことは確かに there の虚辞性の大きな証明であるが、しかし、一方でこのような分布が存在することを考慮に入れなければならない。そこに現われる *pær* はまさに Erdmann の言う ‘deictic elements’ を色濃く持ち、例えば先に引用した Orosius の一節では Eastland という漠然とした空間に収斂されるものであろう。

以上のことから考えると、これらの *pær* を単に黒か白かという観点から見るところに無理が生じる。黒でもなく白でもない灰色の、それも幅を持った灰色の存在を認めなくてはならない。限りなく黒に近いものから、限りなく白に近いものまで存在するということである。つまり、古英語期における E.there はまだ A.there との分化は十分ではなく、灰色の部分を中間にしてつながり、それがあつた場合には極端に片方へ振れるといった状況であつたと考えるのが妥当であらう。

問題とする事柄は異なるが、古英語においてはしばしば起こる節の頭位の *pa*, *ponne*, *pær*, *forþam* や *se* に関して副詞か接続詞か、指示詞か関係代名詞かの曖昧性に関して Donoghue & Mitchell は次のように注意を促している。¹²⁾

And the ambiguity goes deeper, . . . , because . . . ‘it is in my opinion an oversimplification to think of the terms “ambiguous adverb/conjunction” and “ambiguous demonstrative/relative” as necessarily implying that the choice was simply between a subordinate clause and an independent sentence in the modern sense of the terms. In many passages the choice was very possibly never conceived as or intended to be black and white; thus the meaning and function of *pær*, for example, could sometimes hover between ‘where’ and ‘there’, neither fully subordinating nor coordinating. Our modern sensibilities, shaped in part by modern conventions of punctuation, encourage us to decide exclusively in favour of one or the other.

つまり、現代英語の枠組みで古い時代の英語を分析し、黒か白か割り切ろうとする危険性を説いているが、まさにこのことが、存在文の *pær* の考察にも必要なことであらう。

結局、*pær* はあくまで場所的・空間的なコンテキストの中で起こるものであ

と考えられている。しかしながら、その emptiness に異議を唱える人もいる。例えば Bolinger はこれは ‘neither empty nor redundant, but is a fully functional word that contrasts with its absence.’ であると考えて次のように言う。⁸⁾ 即ち、それは

‘...“brings something into awareness”, where “brings into” is the contribution of the position of there and other locational adverbs, and “awareness” is the contribution of there itself: specifically, awareness is the abstract location to which I referred above’

さらに Erdmann の主張も同一線上にある。つまり、E. there はその直示的要素 (deictic elements) を失ってしまった訳ではないと次のように述べる。⁹⁾

...It has already been pointed out that there is a scale of demonstrative forces for adverbial there in final and initial position. A similar grading can be detected for pro-nominal there. At the one end there are cases which are empty of deictic elements, while at the other end there are instances where pro-nominal there still retains a locative marking...

Breivik はこれに異論を唱えるが、要するに、E. there のもつ指示的要素は必ずしもゼロと言い切ることもできないということであり、A. there との分化は疑問の余地はないものの、そこに漠然とした空間的感覚が漂っているということであろうか。¹⁰⁾

IV

E. there 構文が確立し、A. there と明白に区別される現代英語において、今なおこのような主張が見られるということは、一般に言われている E. there の虚辞性にも灰色の領域を伴っている可能性の証明になるであろう。翻って、E. there 発生期のそれを論ずる時、この問題はより一層大きな比重を占めることになる筈である。Nagashima は E. there を ‘introductory there’ と呼び、古英語における introductory *þær* は現代英語のそれに比して意味的に、文体的に ‘more substantial load’ を担っているとする。それは ‘a prompter of the story’ としての働きであり、‘demonstrative-vocative’ な機能であるとする。¹¹⁾ 前述の *Orosius* からの例文もそれぞれの文脈から取り出して眺めると

しているとは思えないが、さりとして意味的に全くの虚辞と考えるのも不自然であろう。

さらに *Twelfth Century Homilies* からの次の一節を見てみよう。⁶⁾

... þenne syððæn bisihð Drihten to þam synfullæn monnum 7 þus to heom cwcæð, 'Gewitæp, ze awarizede, from me on þane mycele æðm, 7 on þæne ece brune, 7 on þene bittræ þrosm hæles fures, þær þe leiȝ repelice bærneð, 7 þær þa dracæn þa synfullen teræð mid heoræ topum. 7 þær þa scyldize bærnæp, 7 þa wurmæs héom mid weallende muðes forswolȝeð; 7 heoræ ansyne bið þær mid teares oferfleowen, 7 þær bið ezeslic toðene grind; 7 þær næfre ne áteoræð þeo swearte niht, ne þeo þystre dymnes, ne heom þær nefre ne bið isceawed lihtes leóme:for þam þe ze mine lare on eowre mode oferhóȝoden, 7 ze, recelease, nolden mine bodu healdon.' þenne æfter þam þe þa manfulle beoð isceofene wepende on þ ece fýr, þær heo on pine 7 on ece yrmþe wuniæð, heo iseoð þare soðfestræ 7 englæ murhðe 7 isælice monnœ hwit werod herizende ure Drihten. 7 þa ðær cumeð þe hér mán wrohten 7 Godes lare iheren nolden.

ここでは「地獄」という概念を受けて *þær* が連なっている。もちろん、それらは機能的にはそれぞれ *there* や *where* に対応するものであるが、すべてが漠然と「地獄」を referent としていると考えられる。即ち、話題がその referent の範囲内にあるという意識を土台にした連鎖を形成しているということである。

この時期によく見られるこのような不自然とも思える反復はまた *pa*, *þonne* に関しても同様であり、それぞれが文字通りの 'then', 'when' の意味では重すぎる場合がよく見られる。事実、特にこのような *pa* に関しては、様々な考え方があがある。⁷⁾ この時期の *pa* は、単純に現代英語の *then* では置き換えられず、ある場合にはほとんど実質的な意味を持たない、いわば同一文脈を構成する時間的な連鎖辞のような働きがあったと考えられる。このようなことから同時期に同じような分布を示す *þær* は、*pa* が時間的なコンテキストの中で用いられるのに対して、場所的・空間的なコンテキストの中で起こる語として存在したと考えられる。

III

現代英語においては *E.there* は一般的には虚辞とされ、意味的には *empty*

hys speda hy forspendað mid þan langan legere þæs deadan mannes inne, ⁊ þæs þe hy be þæm wegum aleggð, þe ða fremdan to ærnað, ⁊ nimað. ⁊ þæt is mid Estum þeaw þæt þær secal ælces geðeodes man beon forbærned; ⁊ gyf þar man án ban findeð unforbærned, hi hit sceolan miclum gebetan. ⁊ *þær is mid Estum án mægð* þæt hi magon cyle gewyrca; ⁊ þy þær licgað þa deadan men swa lange ⁊ ne fuliað, . þæt hy wyrcað þone cyle him on. ⁊ þeah man asette twegen fætels full ealað oððe wæteres, hy gedoð þæt ægþer bið oferfrozen, sam hit sy sumor sam winter.

このパラグラフは ‘Eastland’ とそこでの風習の紹介がなされている部分であるが、その前半部と終りの方で *pær* が頻出し、中間部分では *ponne* (*ðonne*) の多用が目立つ。OED が *there* 存在文の例としてあげた文は36行目に見られる文である。確かにこの文は場所を表わす副詞句を伴い、新たな人物の導入といった現代英語の観点からすれば典型的な *there* 存在文の環境である。しかしながら、構文的には全く同じような文が前半部にも見られる。4行目から7行目にかけて斜体で表した3文がそれである。因みに Quirk はまさにこの部分を古英語における *there* 存在文の例としてあげている。いずれもあるものの存在・非存在を表わし、3文すべて同一節の中に *pær* と場所を表わす副詞句を伴っている。特に6行目から7行目にかけて出る文 ‘*pær is mid Estum ðeaw*’ は前述のOEDに引用された文とほぼ同じで、主語である名詞が異なるだけである。形の上から判断すればこれらの中からOEDに採られてもよかった筈であるが、敢えてこれらの3文ではなくて、ずっと後に出てくる文が選ばれている。これらの文が避けられたと考えられなくもない。ここで意識されたとすれば、それはその文が出る環境の違いであろう。

そこで改めてこの前半部を眺めて見ると、ほとんど一文毎に ‘*pær bið*’ が繰り返され、その流れの中にこれらの文が起こっている事が分かる。Eastland が如何なるところであるのかを述べているのであるが、現代英語ではこのような近接した位置での *E. there* の幾度もの反復は自然ではない。(中間部の *ponne* に関しても同じことが言えよう。) ここに現代英語における *there* 存在文に照して、少なくともこれらの *pær* 存在文は現代英語のそれとは異質な側面を持っているということが言えるであろう。何かこの時期特有の *pær* の幅が感じられる。そして上述のOEDの引用文もやや離れてはいるが、この同じコンテキストの中に起こるものであり、これだけ別個に切り離されるものではない。ここに連なるすべての *pær* が文字どおり ‘in Eastland’ の意味を表明

sense of *pær* is absent...' という問題は避けられず、この点に関しての主観的判断による曖昧さが常につきまとうことになる。

このような観点から、先に見た O E D が O E における E.there の唯一の例としてあげた *Orosius* からの文をここで改めて検討してみることにする。長くなるが全体的にその環境を知るためにその文を含むパラグラフ全部を引用することにする。(イタリックスは筆者)⁵⁾

*Þæt Estland is swyðe mycel, 7 pær bið swyðe manig burh, 7 on ælcere byrig bið cyningc. 7 pær bið swyðe mycel hunig 7 fisc[n]að; 7 se cyning 7 þa ricostan men drincað myran meolc, 7 þa únspegigan 7 þa þéowan drincað medo. Þær bið swyðe mycel gewinn betweonan him. 7 ne bið ðær nænig ealo gebrowen mid Estum, ac pær bið médo genóh. 7 pær is mid Estum ðeaw, þonne pær bið man dead, þæt he lið inne unforbærned mid his magum 7 freondum * monað, ge hwilum twegen; 7 þa kyningas, 7 þa oðre heahðungene men, swa micle lencg swa hi maran speda habbað, hwilum healf géar þæt hi beoð unforbærned, 7 licgað bufan eorðan on hyra husum. 7 ealle þa hwile þe þæt lic bið inne, pær sceal beon gedrync 7 plega, oð ðone dæg þe hi hine forbærnað. Þonne þy ylcan dæg(e) (þe) hi hine to þæm áde beran wyllað, þonne todælað hi his feoh, þæt pær to lafe bið æfter þæm gedrynce 7 þæm plegan, on fif oððe syx, hwylum on ma, swa swa þæs feos andefn bið. Alecgað hit ðonne forhwæga on anre mile þone mæstan dæl fram þæm tune, þonne oðerne. ðonne þæne þridan, op þe hyt eall aled bið on þære anre mile; 7 sceall beon se læsta dæl nyhst þæm tune ðe se deada man on lið. Þonne sceolon beon gesamnode ealle ða menn ðe swyftoste hors habbað on þæm lande, for hwæga on fif milum oððe on syx milum fram þæm feo. Þonne ærnað hy ealle toward þæm feo; ðonne cymeð se man se þæt swyftoste hors hafað to þæm ærestan dæle 7 to þæm mæstan, 7 swa ælc æfter oðrum, op hit bið eall genumen; 7 se nimð þone læstan dæl se nyhst þæm tune þæt feoh geærneð. 7 þonne rideð ælc hys weges mid ðan feo, 7 hyt motan habban eall; 7 for ðy pær * beoð þa swyftan hors ungefoge dyre. 7 þonne hys gestreon beoð þus eall aspended, þonne byrð man hine út, 7 forbærneð mid his wæpnum 7 hrægle. 7 swiðost ealle*

Quirk は一頁ほどの短い論文の中でこともなげに ‘*expletive or existential there*’ は古英語にすでに存在するとし、いくつかの例をあげる中で、最初に、O E D が初例として引用する文を含んだ同じパラグラフの中から他の例を採って次のように言う。³⁾

In the *Orosius*, for instance, while rare for the most part, it occurs nearly a dozen times in the interpolated account of Wulfstan’s journey. One cannot always be sure that the local sense of *per* is absent, but there can be little doubt in cases like that:

7 ne bið ðær nænig ealo gebrowen mid Estum, ac pær bið medo genoh. 7 pær is mid Estum ðeaw, þonne pær bið man dead.

ここに引用された文はいずれも *there* 存在文であるとする。確かに少なくとも、形の上では E. *there* 存在文と思われるものが古英語の書き物の中に散見されるのは事実であり、従って E. *there* の起源を古英語に認めることには異論はないように思われるが、その語の内容をどのように評価するかによって、その主張の中身が大きく変わってくる。

II

古英語期に *there* 存在文の起源を認めるにしても、そこに現われる *pær* が、明白に場所を referent とする副詞の *pær* と比較して、意味的に機能的にどの程度の隔たりを示すのかが問題となってくる。この点に関して例えば Breivik は古英語における *there* 1 (E. *there*) と *there* 2 (副詞の *there*) との分化を認めた上で次のように結論づける。⁴⁾

The fact that *there* 1 and *there* 2 are differentiated in Old English does not mean that they were *always* two words... If [*there* 1] did indeed derive from [*there* 2], the separation must have occurred before the OE period.

つまり、E. *there* と副詞の *there* (以後 A. *there*) の 2 種類の *there* を認めながらも、場合によってはその境界線は必ずしも鮮明であるとは限らないということである。したがって上述の Quirk のことばの中に見られるように、特にその初期の段階においては ‘One cannot always be sure that the local

存在構文の *Pær* とその指示性

杉 山 隆 一

いわゆる *there* 存在文の史的発達に関して論ずる場合、その *there* の意味的な曖昧性が、大きな障壁となる。これは *there* には二つの機能があり、両者はしばしば形態的には全く区別がつかないことに起因する。言うまでもなく、それは一つは副詞としての指示機能であり、いま一つは存在文を構成する *there* としての機能である。少なくとも現代英語では意味的に ‘empty’ とされるこの存在文の *there* (Existential *there*, 以後 E. *there*) についての史的研究は決して多くはないが、1983年に Breivik がその起源から現代英語に至る、いちおう網羅的な研究を公けにした。しかし、当然ここでもまた文例中の *there* (*pær*) の識別に一部、曖昧性を残し、その曖昧性ゆえに、‘the figures illustrating the use and the non-use of *there*¹ [E.*there*] are not intended to convey more than an illustration of general trends.’¹⁾ としている。そこでここでは、その初期の段階での *there* 存在文と目される文における *there* (*pær*) について、意味的・機能的な観点から多少の考察を試みてみたい。

I

これ迄のところ Breivik を含めて古英語期にすでに *there* 存在文の存在を認めるのが一般的となっている。例えば O E D では次の例をいわゆる E. *there* の初出例とし、かつ、古英語期ではこの1例のみをあげ、その次には1297年の中英語期のものをあげる。²⁾

c893 K. Ælfred Oros.i.i. § 22 *pær* is mid Estum an mæzð.
1297 R. Glouc. (Rolls)7551 *pær* nas prince in al *pæ* world of so noble fame.